

バレンタインデー 戦争 一 人ぼっち

まつやに。

戦争は無情だ。

戦争に善悪などなく、自国の正義を振りかざして敵国の正義を打ち壊す。その為に犠牲になる人数は計り知れない。軍人は兎も角、市民が爆撃の音に怯え銃弾に身体を貫かれるのはいい迷惑どころの話ではない。自国の事とはいえなんの関係もない人達の命が亡くなるのは納得がいかない。

そう考えている人間は多くいる。私もその一人だ。だがどれだけの人間が歴史を重ねて戦争根絶を訴えた所で今という時間まで戦争は存在している。そしてこれからも存在し続けるのだろう。

戦争がなくなる事はない。もしなくなるとすれば、地球上に人間が一人きりになった時だろうか。

かく言う私は戦争反対派の意見を持っているが軍人として戦争に参加している。銃を担ぎ、防弾チョッキとヘルメットをして瓦礫塗れの地面をブーツで歩く。マスクとサングラスをしていなければ砂塵まみれになっていただろう。

今歩いている所はつい先程まで銃撃戦があったと思われる場所で、元の形も把握できない程に粉碎された瓦礫がそこら中に飛び散っており、建物の壁を見ると血痕と銃痕があった。微かにだが硝煙の臭いもまだする。味方がやったのかやられたかは死体がないために分からない。ただまだ遠くには行っていないのは確かだろう。

私もつい先程迄自分の部隊で銃を構え発泡し命を奪っていた。だが敵の爆撃にやられ建物の崩落とともに部隊と離されてしまったのだ。無線は電波を妨害されているのか、それともただ単に壊れているのかは知らないが反応はない。無線の連絡もなく、じっとしている訳にもいかなかった私は単身で合流ポイントまで向かうことを決めた。

荒廃していてハッキリとは分からないが住宅地域に足を踏み入れたようで、空き家に敵兵が潜んでいないか確認しながら進む。覗くとボロボロに崩れた家具や日用品の他に敵味方問わずの兵隊の死体、そしてただ巻き込まれた市民の死体が乱雑に倒れている。

その光景を見て歯を噛み締める。罪もなく罰もない人間がなぜ死ななくてはならないのか。目の前で倒れている少年はもしかすると大事な人の所へ行こうとしていたのかもしれない。それを私みたいな目も口も隠した機械のような人間に撃たれて命を落としたと考えると私はこの世界に虫唾が走った。

私は家屋から目を離して合流地点へ急ぐ。亡き人の為に感傷に浸るのは別にいい。だが私は軍人としての生き方を選んだのだ、その私が感傷に浸るのは職務ではない。

しばらく歩いた時、私の耳に微かに届く声があった。その声はまだ幼く泣き声も混ざっていても弱々しい。一步一步声のする方へ銃を構えながら近づいてく。声の所為でここが戦場なのだと分からされた。近づくとつれて泣き声が聞こえて来る。それと比例するように私の足音は小さく、そして静かになってゆく。

全身の感覚が鋭くなっていく。踏みつぶした砂利の一粒一粒が崩れていくのが分かる。風が体に当たり吹き抜けるのが分かる。

やがて一つの廃屋にたどり着いた。泣き声はここからする。ゆっくりと中を覗くと半壊した

ソファとタンスの裏で一人の女の子が泣いていた。肌の色や声音で現地の娘だと理解できた。

私は少女に声をかけた。「大丈夫か」と。

その一言で少女の態度は一変した。私の姿を見て肩を震わせて体を抱きしめる。そしてただただ「殺さないで」と連呼する。その姿はあまりにも貧弱で戦場には似つかわしくない、まるで狼の縄張りに紛れ込んだ羊のように生気がない。生き延びようとする意思すら感じられない。ただただ目の前の男の気分を損ねないように身体を丸めるだけだった。

一歩踏みしめるたびに少女の瞳からは涙が溢れて身体が跳ねる。その姿に私は痛々しさを覚えると共に戦争の恐ろしさを再び噛み締めた。こんな穢れの知らない純粋な子供がここまで他人を怖がり疑心を生み出してしまうようになるとはと。

私は銃を手の届く範囲の壁に立て掛け、少女の隣にしゃがむ。少女は怯えて膝に爪を食い込ませるほどに身体を縮めていた。

「大丈夫だ、怖がることはない。私は君に銃を向けない、暴力も振るわない。ここは危険だ、一緒に行こう」

少女は言葉に反応したがうずくまるだけで返事はない。だがゆっくりとこちらを向いて丸腰の私を見た。少女の顔は涙と泥で汚れていて髪も土まみれでボサボサだった。言葉が届いたのか少女はさっきより一層の涙を流して私に痩せ細い体を埋めてくる。それを受け止めるようにして優しく抱き上げた。とりあえずこの少女が泣き止むまで抱きとめることにする。それから少女を助けることにしようと思った。戦場で人を助けると言う事がどれほど自殺行為かは知っていた。だが目の前で泣いている少女一人助けられないのだったら軍人になった意味が無い。

私は人を守るために軍人になったのだから。

しばらくして少女は泣き止んだが私に対しての警戒心を解こうとはしなかった。それでも良かったと感じられた。こんな死体まみれの場所で泣き叫ぶよりかはよっぽどマシだ。私は彼女と言葉が通じればいい。それだけで彼女を助けられる可能性は大幅に上がる。

「立てるか」と聞けば無言で頷いて立ち上がってくれる。

そうだ、それでいいんだ。

「ここからもう少し歩いた先で私の仲間達と会える。そしたら君を安全な所へ連れていける。だから一緒に行こう」

私は少女に手を差し出した。手を繋ぐ意図だったのだが少女は手を差し出すことはせずに空振りに終わってしまった。それもそうだ、目の前で私と同じような格好をした人間が親や友人を殺していったのだ。当然の反応だと思い腕を下ろして代わりに銃を再び持つ。

すると少女は私に何かを差し出す。チョコレートだ。一度溶けてしまってからまた固まって歪になってしまったチョコで、少女は恐る恐る手渡すだけで言葉には出さなかったが礼の意味が込められているのだろう。

だが私は少女に対して同情する訳でもなく、怒りも示さなかった。ただ「ありがとう」と口に出していた。少女からはマスクで隠れていて見えないだろうが私の顔は多分無表情だ。

少女を連れて廃屋を抜けて住宅地も抜ける。少女を連れての移動は単独行動とは違って様々なところに意識を向けての行動となったが、少女は私の指示に対して正確に動いてくれたために、特に大きな問題もなく抜けることが出来た。

ただ敵側の兵が近くで動いてるらしく、どうやら私を探しに来ているらしい。どこからか情報が漏れて私の居場所が知られてしまったのだろう。

ザッ……ザザ……ザザザ。

今までなんの音も発しなかった無線からノイズが流れてきた。私は無線に耳をすませると聞き慣れた同僚の声が聞こえてきた。

「……聞こ……えるか。聞こえていたら例のポイントに5分後に来い。それから5分以内に上空からお前の姿が確認できたらヘリを降ろす。敵側のジャマーが働いてこの通信はこちら側からの一方通行となっている。5分後にお前が姿を確認できることを願う」

私は通信を聞いて助かる希望が目に見えてきたと感じた。後数百メートルで仲間のヘリが助けに来る。私は少女に助かると説明すると少女も心なしか安堵しているようだ。

だが無線に気を取られていた私は敵の姿を感じ取ることが出来なかった。背中越しに長銃を突き付けられ、そのままゆっくりと壁に押し付けられた。銃とナイフを手放し、丸腰の私は自分自身の死の恐怖よりも少女の安否が気になった。助けると約束したのに。私はまた誰も助けることが出来ず、あまつさえ子供でさえも助け出すことが出来ないのかと奥歯を噛み締めた。

諦めかけた私に対して少女はまだ希望を捨てなかった。少女は力を振り絞って敵兵に体当たりをした。転ばすことは出来なくても注意とよろけをとることはできた為に一瞬隙ができた。敵兵は少女を銃床で殴りつける。訓練された大の男の力で殴られた少女は額から血を流して地面に倒れ込む。

私は敵兵に殴りかかりマウントポジションを取ると顔を殴り、首を腕で押さえて長銃を蹴り飛ばす。相手はナイフを取り出して突き立ててくるが間一髪でその腕も抑えると相手の拳銃を奪い頭部に向かって引き金を引く。発砲音と共に相手は意識を失って死んだ。たった一個の金属の小さい塊で人はこんなにも簡単に死に絶える。

立ち上がって少女に駆け寄ると気絶してはいるが呼吸はしていた。私は少女を抱き上げると、今度は命の恩人に対して心から「ありがとう」と述べた。

合流地点へ着くとヘリのローター音が聞こえて来る。空を見上げるとゆっくりと降りてくる姿が確認できる。降りてきたヘリのハッチからは同じ部隊の隊員が降りてくるのが分かった。私は駆け足を安心感から歩みに変える。助かったと大きく息を吐いた。

だがそれは束の間の休息だった。背後から聞こえる銃撃の音に対し仲間たちは銃を構えて応戦を始める。それも一人や二人ではなく少なくとも10人は居る。私と少女は二つの軍の応戦に挟まれるようにしていた。隊員の一人がこちらへ来いと大きく腕を振る。私は身をかがめて少女の頭を私の胸に埋めるようにして走り出す。

突然背中に熱さを感じた。その後すぐに足にも。その熱さが撃たれた痛みだと理解したのは地面に倒れてからだだった。私は少女に覆い被さるようにして倒れこみ痛みを耐える。今すぐ抱え上

げて走り出したいが足の痛みがそれを許すわけがなかった。

少女が目覚ますが目の前の光景と轟音で混乱する。私は説明している暇はないと思っただ少女に向かって叫んだ「走れ」と。

私のことはいいから自分が生きる事だけ考えろと。

少女は涙を流して無理だと叫んでいたが私は激励する。あのヘリまで辿り着ければ君は助かる。こんな地獄みたいな場所から離れることが出来ると。

少女は意を決して私の下から体を半身乗り出すと一気に駆け抜ける。わたしは拳銃を抜き取って敵軍の部隊を見る。銃を構えている奴らがざっと見て15人ほど。そのなかで少女に向けて銃口を向けていると思われる数人に狙いを定めて撃つ。だからといって当たるわけでもなく痛みで震える手で撃つ弾丸は牽制ぐらいにしかない。

ヘリの方へ向けると今しがた少女がヘリの中へ乗り込んだところだった。仲間の一人が次はお前だと合図をするが私は無理だと手を振る。そして叫んだ。

「俺はいいからさっさと飛び立て！ その子を守ってくれ！」

それを聞いた仲間は「すまない」とだけ言ってヘリに乗り込む。応戦していた奴らもヘリに乗り込み始め、遂には私の目の前で飛び立ち始める。ローターが高速で回転し始め風圧が周りに伝わっていく。そして地面からゆっくりと離れ始め機体が回転する。

痛みすら感じなくなり意識が薄れてきた私はおもむろに少女から貰ったチョコを口に運ぶ。口の中は土の味だったが少し甘みを感じてきた。銃撃の轟音や軍用ヘリのローター音が耳や体を覆う中、口の中だけは場違いで甘い。それがおかしくて私は笑ってしまった。

私は空を仰ぐ。

仲間のヘリは完全に飛び立ち、逆光と高度でただの黒い点に見える。銃撃は止んでもう先程のような騒がしさはない。それとも私の耳がヤラれただけなのか。

どちらにせよ私はもう死ぬのだろう。周りは土煙が上がるだけでもう誰も居ない。一人だ。一人きりで死ぬ。空を飛んでいる鳥でさえ徒党を組んで居るというのに。

そうして私の意識は薄れていく。視界も暗くなって光さえ分からなくなっても、最後まで口の甘さは理解できた。